

# IMAJ

ニュース  
NO.64

発行年月日 1991年4月25日  
発行所 (社)国際MRA日本協会  
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4  
TEL.03-3821-3737  
FAX.03-3821-6479  
発行人 住友 義輝  
頒 価 1部200円

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣



●世界中からコースに集った参加者の一部

## インド青年スタディーコース・レポート

### Equipping oneself for a life time

—意義ある人生を送るために—

高橋 千恵  
(通訳)

「Equipping oneself for a life time (意義ある人生を送るために準備する)」というタイトルが付けられたこのコースの期間は六週間で、若者が自分を知り、世界の情勢を知り、よりよい未来のためにどんな役割を果たせるかということを知るのが目的でした。

二十カ国から参加した三十名の中には、はるばるポーランドやコロンビアから参加した青年や、タイの難民キャンプのカンボジア難民、ビル

一、六度目のインド訪問  
インド訪問は今回で六度目になりますが、これは「変人」扱いされかねない数字かもしれませぬ。ただでさえ湾岸戦争の影響で総体的に通訳の仕事が減ったこの厳しい冬に、仕事の依頼をわざわざ断わり時間とお金をかけて出かけて行くというお人好し振りが自分でも信じられない位でした。しかし、昨年インドのMARRから青年スタディー・コースを手伝ってほしいという手紙を受け取った時、私はこの要請に応えるべきだと確信し、一月中旬に日本を後にしました。

二、自分を駆り立てているものは何ぞ？

#### ◀主な内容▶

- ◆ Equipping oneself for a life time 1P  
インド青年スタディーコース・レポート 高橋 千恵
- ◆ MRA文化講演会シリーズ 激動の世界と新秩序 8P  
朝日新聞国際本部長 浅井 泰範
- ◆ 第45回MRAコー世界大会のご案内 5P
- ◆ 世界のMRA最近の動き MRAワールドニュース 13P
- ◆ コー豆知識 ●歴史 ●マウンテンハウスでの生活 ●言葉etc. 6P
- ◆ 湾岸戦争に関する緊急アピール 18P
- ◆ エッセイ「九十四オの誕生日に思うこと」 7P
- ◆ 関西月例会シリーズ「逆境を克服する心」 19P

日本家族計画連盟会長 加藤シヅエ

住友生命保険相互会社 相談役名誉会長 新井 正明

マ系オーストラリア人、インドのモ  
ンゴル系少数民族の人などがいまし  
た。その殆どは学生でしたが、中  
にはジャーナリスト、麻薬中毒患者の  
ためのカウンセラー、銀行員、コン  
ピューターのインストラクターもい  
ました。

コースでは自分自身をじっくりと  
見つめ直す機会が多く与えられま  
す。その一つに「自分を駆り立てて  
いるものは何か？」というセッシ  
ョンがありました。利己主義、恐れ、  
周囲の期待、我が身の安全、責任感、  
自分自身の人生のゴールなど、様々  
な答えが返ってきました。自分とい  
う人間をしっかりと把握した上で、機  
会や才能に恵まれたなら、それを人  
のために積極的に使っていけるよう  
な人材に育って欲しいとの願いが込  
められていました。東京での慌ただ  
しい日常について流されがちだった私  
にとっても、物事を深く考え他の  
人々の経験に耳を傾けることは新鮮  
な感動でした。

### 三、人間中心の援助

インドの多様な姿を知るために、  
バスで二十時間揺られて訪ねた隣の  
グジャラート州の村々では、マハト  
マ・ガンジー翁の思想を受け継いで

都市での生活を捨て自ら質素に暮ら  
しながら、貧しい村人と一体となっ  
て、井戸、家、学校、そして工芸品  
などを作って開発に努める人々に会  
いました。昨年、日本の援助で行わ  
れたダム建設のために、下流に住む  
数十万人のインド人が土地を追われ  
たというニュースが日本でも報じら  
れ、巨大開発援助の問題点が指摘さ  
れましたが、これとは対照的に、人  
間を中心として人々の生活様式に沿  
ったきめの細かい援助の実例を目の  
当たりにすることができ、関係者の  
献身とその成果に感動を覚えました。

その村での一週間の滞在中は、教  
員養成学校の科学室に寝泊まりし、  
何故か私一人がノミに百六十カ所も  
食われて猛烈に痒かったことと、バ  
ケツから盛られたカレーを食べたこ  
とを、今でも鮮明に思い出します。

### 四、政治的混乱、麻薬戦争、 難民キャンプ

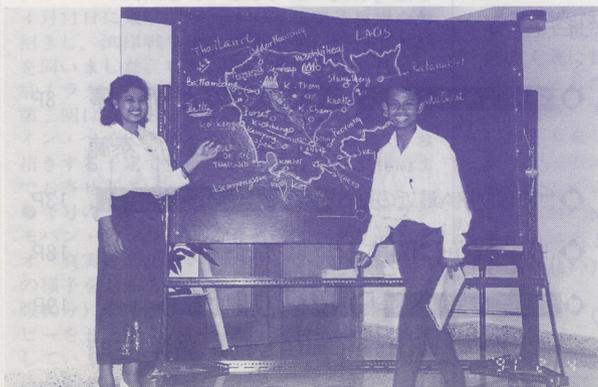
#### 難民キャンプ

コースの夜のプログラムでは主に、  
参加者の自国紹介が行われました。  
ポーランドの学生三人が随分と政治  
に詳しいのに感心していると、「政治  
に無関心でいられる社会から来た  
あなたは幸せよ」と言われてしま  
いました。「政治の動向が日々の生活  
に直接影響」から、関心を持たな

いわけにはいかない。やつと国が再  
建に向かって動き出した今、祖国に  
対する新たな愛と責任感が芽生え始  
めた」と言っていました。

麻薬シンジケート「メデジンカル  
テル」と政府の全面戦争で国が揺れ  
ている南米コロンビアからの学生は、  
「コヒーやエメラルドを初めとす  
る豊かな資源が、麻薬マフィアや左  
翼ゲリラの暗躍のため効率よく利用  
されていない。自国の最大の問題は  
人間そのものにある」と嘆いていま  
した。また、麻薬マフィアを逮捕す  
ることも必要だが、麻薬を買う側を  
取り締まることが麻薬問題の真の解  
決につながると繰り返し訴えていま  
した。

カンボジア難民の二人はバスに乗  
る度にすぐ車酔いしていました。聞  
けば難民キャンプを出たのは実に十  
一年振りとのことでした。その一人  
の二十一歳の女性は、戦乱、病氣、  
栄養失調で次々に家族を失い、たつ  
た一人で生きてきたということだ  
す。無論「普通」の子供時代の体験はな  
く、今でも「移動」と「労働」とい  
う基本的な権利を奪われたままキ  
ャンプ内での生活を続けています。一  
人暮らしは私も同じですが、それは自  
分で選択した結果であり比較にはな  
りません。参加者は皆明るく若者で



●今は未だ近くて遠い祖国を紹介するカンボジア難民の二人



●コースの運営スタッフと共に食事する筆者(左から二人目)

したが、深く知るうちにそれぞれ大変な人生を背負って生きているのだということに気付かされました。

## 五、過去の痛みと和解への

### 試練

私の帰国が間近に迫ったある日、韓国から参加した二人の大学生と話す機会がありました。「近くて遠い国」と互いに呼びあうこの隣国の若者と話をしたのは初めてでした。彼らが歴史に詳しいことに、先ず驚かされました。日本の植民地支配下に

あった三十六年間に、経済的、軍事的、文化的侵略を受けたことを初め、強制労働等々耳をふさぎたくなるような事実を、英語力不足のために無口な普段の印象とはがらりと変わって、次から次へと話してくれました。

私が日本人だという理由で、異国の地で日本の戦争責任云々の話を聞かされる羽目におちいることは多々あり、今回も気が遠くなりそうな思いをしました。が、外国の人々と直接知り合う機会を与えられた人間は、友情の橋を架ける喜びを味わう前に、過去の痛みと和解への試練を経験するよう定められているのだらうと思ひ直して、徹底的に話し合うことにしました。

先ず日本のどこが嫌いなのか尋ね

てみました。

第一に、日本は過去の過ちを公式に認めていない、次に、今も在日韓国・朝鮮人に対する差別が残っているのが理解できないとのことでした。

次に、両国の関係を改善するため日本はどうすべきだと思ふかという問いに対しては、とにかく日本の首相が公式かつ謙虚に謝罪し、南北統一の支援と在日韓国・朝鮮人の社会的地位の向上に努めてほしいとのことでした。

しかし中には、「韓国・朝鮮人でも日本の一流大学に入るのには可能か?」とか「日本は本当は南北統一を望んでいないのではないか?」など、明らかに反日感情をおおるようなマスコミの記事をうのみにしたような意見も見受けられました。反論しなかつたのですが、歴史にも現状にもうとい私は正確に反論できませんでした。そこで日本の歴史、特に暗い過去と言われる部分をもっと知り、その上で日本と韓国・北朝鮮を初めアジア各国との関係を改善するために自分にできることを見つけ、恐れずに行動しようという心を決めました。

二人は、「日本の若者と真剣に話し合ったのは今回が初めてだ。これからは日本に対する先入観を植えつけるような報道を頭から信じるのは

やめて、日本の大学生や若者同士で交流し、情報や考え方を知ろう努力したい。友人にも働きかけていきたい。」と語り、「でも、日本に感謝していることも一つある。アジアが見下されずに済むのは、日本が世界であれだけの地位を獲得してくれたお陰だから」と付け加えました。

## 六、日本の歌を韓国人と唄う

その晩、各国のお国自慢の出し物を披露する機会があつたので、三人で「釜山港へ帰れ」と「さくらさくら」を唄いました。日本ではラブソングとして人気の高いこの「釜山港へ帰れ」が、実は日本へ連行された家族の帰りを待ちわびる悲劇の歌だということを知りました。再び文化的侵略を受けるのを恐れている韓国の若者が、日本の歌を進んで覚えようとしている姿を見て、長く付き合える友人になれそうな予感を覚えると同時に、これから両国の和解のためにやるべきことの大きさを改めて思いました。世界の、特にアジアの人々がビジネスのためではなく、真に日本の国民や文化を知りたいという理由で日本語を学ぶ日が遠からず来ることを、別れ際に貰った韓国のヒモ細工を見る度に祈っています。



●グジャラート州への20時間のバスツアー



●訪れた村で糸紡ぎに挑戦する韓国からの二人の参加者

## 七、神様のインスツルメント

コースを振りかえって今つくづく思うのは、私は素晴らしい国を受け継いだということです。国が負担となって覆いかぶさったり、祖国に裏切られ、人生を狂わされたりする人々が多い中で、なんと幸福なのでしよう。それだけに近隣諸国民が未だに抱いている日本への戦争の恨みという「負の遺産」もしっかり引き継ぐべきだと思います。これまで政治に無関心だった私に大きなことは言えませんが、日本の強大な経済力に対する各国の恐れや内面志向におちいりがちな日本の政治というものにも対処していかなければならないと思いました。

インドの僻地の学校の生徒が一番行きたい国として挙げたのは、アメリカやオーストラリアではなく日本でした。長所も短所も見据えた上でこそ、世界の期待に応えられる日本への第一歩が踏み出せるのだと思います。

インドで「神様のインスツルメント（道具 楽器）になりたい」という言葉をよく耳にしました。いざ決断や行動が必要な時に、錆びついて動けないことがないように、頭も心も磨いておきたいものです。

今回のインド滞在を通じて、素晴らしい人々に数多く出会いました。同時に、インドを初め世界の現実には厳しいことも再確認しました。内外に目が開かれ、MRAの初心に戻ったような気がします。いささかためたようなあつた今回のインド行きでしたが、自分がお手伝いできたことより受け取ったものの方が数倍も大きかったことをお伝えしてこのレポートを終わります。



●ポーランドからは三人の学生が参加した

## MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

**CHANGE**  
THE NEW INTERNATIONAL MONTHLY MAGAZINE

フォー・ア・チェンジ

**定期購読受付中**

世界中で起こっている変革(チェンジ)とそれを担う人たちのイニシアチブを!

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌(英文年間11回発行)定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期購読料(3ヵ月分=¥1,500 1年分=¥4,500 ※共に郵送料込み)を郵便振替(口座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4  
社団法人 国際MRA日本協会  
「フォー・ア・チェンジ」係

# CAUX 1991

July 5 - August 25

## コー世界大会のご案内

メインテーマ 民主主義は一人ひとりから始まる

# Democracy Starts With me

### 1991年MRAコー世界大会プログラム

#### 開会式

7月5日(金)～18日(金)  
「新しいヨーロッパ社会の創造」

#### 青年会議

8月3日(土)～10日(土)  
「今、生きがいを問い直す」

#### 家族会議

7月20日(土)～24日(水)  
「健全な家庭と社会」

#### 産業人会議

8月14日(水)～18日(日)  
「市場経済を機能させるモラル」

#### 女性会議

7月25日(木)～30日(火)  
「平和の担い手を目指して」  
●世界の女性たちの主権による会議

#### 日米欧財界人コー円卓会議

8月18日(日)～21日(水)

#### 都市問題会議

8月19日(月)～25日(日)

「危機に瀕するコミュニティ」●お互いの体験に学びあう



#### マウンテンハウス

スイスのジュネーブから車で1時間半、眼下にレマン湖を望む標高1000メートルの村コー(Caux)にあるMRA世界会議場。毎夏、世界中から集まった何千人という人々が静かな環境の中で様々な会議に参加する。また、料理、サービング、皿洗いなどの共同作業を色々な国の人々と一緒に体験することによって、チームワークや心を開くことの大切さを身を以て学び、相手の身になって物事を考えられる心が養われる。

### International conference for Moral Re-Armament

#### 入会のご案内

(1) 正会員 個人 年額 3,000円

法人 年額 50,000円

(2) 賛助会員 個人 年額 1,000円以上

法人 年額 50,000円以上

郵便振替口座

東京八一三二八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌「MAJニュース」等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り

●信頼できる人との出会い

●新時代に必要な情報

●心身の健康

●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度「50,000円(寄付扱い・年額)」を新たに設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号

東京五一四一三六六五

口座名 社団法人国際MRA日本

協会特別協力年会費

# コ ー 豆 知 識

## 夏の世界大会

MRA世界大会は毎夏、七月初旬より八月下旬までスイス・コーのMRA世界会議場マウンテンハウスで開催されます。世界中から人種、宗教、年齢、職業などの違いを超えてより良い世界を作ろうという志を持つ人々が集ま

す。  
スイス連邦建国七百年目にあたる今年のコー世界大会では「民主主義は一人ひとりから始まる」の全体テーマのもと、民主主義の道義的、精神的基盤やそのルーツを探ると共に、二十一世紀に向けての新しい心構えやライフスタイルを模索します。

## 歴史

コーのマウンテンハウスは一九〇二年にコー・パレスホテルという豪華ホテルとしてオープンしましたが、第二次世界大戦中はユダヤ人やイタリア人難民の収容所等として使われてきたため、すっかり荒廃してしまいました。

## マウンテンハウスでの生活

マウンテンハウスは世界中からの参加者と一緒、個人的問題から世界的規模の問題に至るまでの様々な問題の解決のためのアイデアを交換する場所

その当時、「分裂してしまつたヨーロッパの融和と世界の平和のために、このマウンテンハウスを世界中の人々が集える場所としてスイスが提供できないだろうか」と考えたスイス人外交官とそのアイデアに共鳴した人たちがいました。戦後間もなく九十五家族の協力を得てマウンテンハウスが買い取られ修復の後、MRAに寄贈されました。こうして終戦の翌年の一九四六年よりMRAの世界会議場として使われ始め、独仏の参加者が一堂に会して和解し、今日のECCの基礎作りの一端を担うな

つてきました。  
サンフランシスコ講和条約締結前年の一九五〇年には広島、長崎両市長、経済人、労働組合代表、国会議員などから成る七十二名の代表団がコーを訪れ、世界から孤立していた日本が国際社会に再び迎え入れられる礎いしとなりました。その後も数多くの日本人が毎年コーを訪れています。

です。全体会議の他にも小グループに分かれる分科会で直接意見を交換することが出来ます。また、食事やお茶の時間にも世界中の人々と打ち解けて交流できるでしょう。

マウンテンハウスのユニークな点は参加者が単に会議に参加するだけではなく、誰でもその運営にボランティアで参加できることです。例えば料理、給仕、血洗い、ベッドメイキング等は全て参加者の協力によつて行われます。

## 付属施設

郵便局、医務室、書店、旅行相談コーナー、劇場、テニスコート、卓球台、サッカーグラウンド等があります。両替はフロントでも行えます。これらの施設で働く人も会議の参加者です。

## 参加費用

マウンテンハウスには北欧の家具やイランのカーペットを初め各国の調度品や絵画が寄贈されているほか、毎年ノルウエーからトンの冷凍魚、アイスから五トンのりんごりんごが送られてきます。また、建物、各種施設の維持管理は労働奉仕により賄まわわれ、多くの人次の協力により参加者の滞在コストを

それぞれのチームがありますので、どれか一つに加われば友人づくりの良ききっかけができるでしょう。

小中学生のためにはお菓子作りや絵本作りのグループが設けられたり、幼児のための遊戯室も設置されています。夜は映画やコンサート、また、世界各国の文化の夕べなど様々な催しが行われます。

自由時間には静かで美しい環境の中で散策やスポーツをお楽しみ下さい。

## 言葉

会議は通常英語で進められ、各国語に同時通訳されます。日本人参加者が多い期間には日本語同時通訳も用意いたします。また、食事の際の通訳は日本人スタッフがお手伝いします。

低く押さえることに成功しています。本年からは、先進国からの一般参加者の滞在費の一部を、途上国からの参加者の滞在費等の補助に充てさせていただきます。

なお、滞在費は、参加の形態、及び会議の種類により異なりますので事務局までお問い合わせ下さい。

社国際MRA日本協会  
〒113東京都文京区千駄木四一三三十四  
TEL〇三(三二二一)三七三七

# 九十四才の誕生日に 思うこと



加藤 シヅエ

日本家族計画連盟会長



●ブックマン博士の前に、韓国代表二人と一緒にスピーチする加藤さん(左から3人目)。1957年6月、マキノ島のMRAセンターで

三月二日は私の誕生日で、九十四才の年を重ねました。人の命は短く終わるの  
か、長く続くのか予定することはできません。私の場合、祖先の血統から長寿の  
家系であり、また、両親のお陰でこれという病も持っておりませんので、あれよ  
あれよと言っているうちに、早百才に近づいて来たというわけです。

私より年齢のお若い方々は高齢者とはどんな状態で生命を保ち続けているのか  
想像もつきませんから、元氣のように見える高齢者を見るとえらい事だと感心す  
るものです。

私の場合も五十年代六十代の時に、七十才以上の方が一人で電車で動かれたり、  
若者に劣らぬ食欲でかつ弁をペロリと召し上がるのを見たりすると全く感心して  
しまったものです。

忘れもしません私が二十三、四才の頃、三池炭坑に技師として勤めていた夫と  
共に、この炭坑町に三年間住んでおりました。ある時、この三井鉱山の本社の所  
在地である大牟田市の小さな劇場で講演会があると聞いて行ってみました。そこ  
ではこの三井財閥の親戚にあたるお祖母様がキリスト教信者で熱烈な講演をなさ  
っているのを聞きました。その方が女である事、女が大衆の前で堂々と講演をさ  
された、そしてその熱烈な事に私は生まれて初めての感動を受けました。勿論お話  
の内容は覚えていませんが、この方は六十才であったと聞きました。六十才とい  
うのは還暦で年寄の仲間に入った事であり、女が大衆の前で大声で演説するなん  
て奇跡のような出来事でした。

それから七十余年が経過した今日、私は還暦どころかもうじき百才になるかも

知れない高齢になりました。最近足が弱くなってベビーカーのような手押し車を  
押して歩く状態ですが、毎日夜寝る時、ああ今日も一日充実した日を送る事が出  
来て有り難かったなど感謝して眠りに就き、朝目が覚めると、今日もあれもこれ  
もしたいと手一杯の仕事をごなそうという喜びに満ちた欲張り心でその日が始ま  
るのです。

私の心を毎日感謝と喜びで一杯にして下さるのはどこのどなた様でしょうか。  
つくづく考えてみると、戦後国会議員となって世に出てきた私が、当時自分は  
相当偉い人間だと自分自身で思い込んでおりましたのに、相馬雪香様のご紹介で  
MRAの国際運動の仲間に入れて下さり、米国のマキノ島の大会を初めヨーロッパ  
のMRAの会合にも紹介され、大変見聞を広めたと思えば格好いいのですが、  
本当は心の中をめちゃくちゃにかき廻されて、そこから新しい出発をせよと背中  
をぽんと叩かれたのでした。

思えばMRAというのは容赦もなく人の心の中に土足で入り込むようにして眠  
っている良心の声を呼び覚ます運動である事を思い知らされました。出来上がっ  
ている人間として自分を評価していた私に投げられた爆弾は容赦もないきついま  
のでした。自分は相当な人間だと思っている私が不用意にMRAのブックマン博  
士のような偉い指導者にお目にかかり、私のお守りにするような文句を書いて頂  
きたいと思つて新しい黒皮の表紙のついた聖書を持って行き、ここに何かお言葉  
をとお願ひして置いてきました。出来上がっているからと側近の方に言われて頂  
載しに出掛けました。博士はにこにこしながらその聖書を私に渡されました。フ  
ロント頁に短い文句が書かれていました。「真の自由とは何を意味するのか真剣に  
求めよ」といった意味の言葉が英文で書かれていました。部屋に帰って静かにこ  
れを読んだ私は正直なところ人を馬鹿にしていると思いました。

私は大衆の自由を求めて国会議員になって社会悪から大衆を解放するために身  
を挺して闘つてきているではないか。その私に自由を求めよとは何と何という事か？  
そこに書かれた本当の自由を求めて、私の傲慢な心、成功を求めめる心、物質欲  
等々こんな心のごみを掃除してMRAの目標であるよりよき世界造りの一端を担  
えるように、MRAの示す正直、純潔、無私、愛の四つの絶対標準と自分自身と  
を照らし合せて自分をより自由にする我が心との闘いを日々繰り返して行く、  
そのような一個の人間の生き方とは厳しいものではあるが一つづつ自分の目の前  
に立ちはだかるごみを征服していく、こんな生き方は今日の私を感謝と喜びと希  
望に充滿させてくれます。

皆様 長生きは楽しいものです。神様仏様が命を与えて下さる限り、私はこの  
我が心の自由を守り続け、接する人々の笑顔と暖かい祈りに感動しながら歩き続  
けて参ります。

皆様方への感謝に満ちてこんな感想をまとめました。

一九九一年三月四日

加藤シヅエ

## 激動の世界と

## 新秩序

激動の時代に「不易」を見抜く

「サッチャー」退陣劇に見る「もの弾み」

「高温革命」から「低温革命」へ



## 朝日新聞国際本部長 浅井 泰範

(あさい・やすのり) 1935年生まれ。名古屋大学法学部卒業後、朝日新聞社入社。インドネシア(1966~67)、ベトナム(68)、中東(70)、外報部長(83~87)等を経て、昨年五月から国際本部長。「ロンドン暮らし」、「国際情勢を総括する」などの著書、「マーガレット・サッチャー」、「女王エリザベス」などの訳書がある。

## 一、見えない脅威に募る不安

かねてよりイギリスMRAのブライアン・ブーバイヤー夫妻の行動に尊敬を抱いてきた者として、今日このような会で話させて頂けることを光栄に思う。

今日は、新聞やテレビなどの大変なメディアの氾濫の裏に流れていることで、最近私がどうしたらよいかと思っていること、困っていること、悩んでいることを話したい。

私たち国際情勢を追っている者にとって最近の異常気象は深刻な問題として考えねばならない要因になりつつある。この原因については、地球温暖化説とか、スプレーに使われているフロンガスの影響だとか専門家の科学的な分析を読めばある程度納得はできる。しかし、この異常気象に対する人間の姿勢というものが真剣に考えられてはいない。異常気象の問題に限らず、私がこのところ非常に気にしている第一の問題は、私たちの身の回りで、音もなく、形も見えない、静かで不気味な脅威が増えているということだ。形として捉えられないが、知らないうちに我々の身近に忍び込んでくる脅威だ。一つはエイズである。アメリカでは一つの大きなウェーブが、

深刻な形で論じられ、名の通ったスターや良く知られた政治家ですらエイズで死んでいくのを見ると、現代というのは実に恐ろしい時代だと思ふ。チェルノブイリの事故も然りだ。あの事故の原因は人為的な要因が大きいが、放射能の問題について我々が余りにも無防備、かつ無意識であったということだ。最近の例では水俣病の問題もそうだろうと思う。殆どの人が一つの大きな山は越えたものだと思っていた。ところが最近、環境庁の責任者の自殺という悲劇的な事態まで生んでいる。脅威というものはずっと分からない形で我々に忍び寄り、ある日突然襲ってくる。学者は分かっているのかも知れないが、一般の人々の感覚からするとそういう脅威が右から左から上から下からひたひたと忍び寄ってくる、これが現代の一つの大きな動きだろう。そういう状況の中で最近世界で注目されているのは、そうした脅威からどうすれば逃れることができるかという動きで、その第一は宗教で、それが再評価を受けていることは間違いない。人間は目に見えない脅威が広がっていくと心の中の不安が募る。その不安は人々の行動とか思考様式を曖昧にし、何かに頼りたいという衝動に追いやる。最近、心の不

安から宗教の存在が世界的に高揚してきている。ペレストロイカのソビエトに於いて一番論議されているのは宗教の問題である。民族運動の根底にすら宗教があることは否定できないし、今までの社会主義がゴルバチョフが出てきてから大きく変化している。その変革の中の人々の不安が、社会主義の中で個人個人が宗教というものを考える契機にもなっている。もう一つは価値観が非常に多様化していくため、宗教分裂が起こり、既成の宗教ではなく、新興宗教や新しい動きというものが次々と生まれていることに對して、既成の宗教がその存在価値を揺るがされてはならないと、新しい理論武装、信者、信仰というものを求めて動き始める。これが最近国際政治でも問題になっている原理主義という問題だ。ホメイニのイスラム原理主義やサタト大統領を襲ったといわれる原理主義の人々の動きにまで連なっていく問題になつていくだろう。日本に於いても今度の即位の礼、大嘗祭の時の新しい意味の神道というものが果たして宗教ではないのかというキリスト者を中心とした論争が真剣さを帯びた。現代に於ける不安定性は背後に存在する目に見えない脅威と切り離

すことではない。無論、宗教に頼る人、頼らない人がいる。非宗教的な人々は一つは心の不安の拠り所を求めて、今、家庭というものに入り込みつつあるだろうことは容易に見取れる。親が受験勉強で子供に對して猛烈なエネルギーを注いでいる姿、会社主義からマイホーム主義でなければならぬという姿、これは生きる上での心の脅威や不安というものと切り離せないのではないかと最近思っている。ある意味で人間というものは常に不安だから、情報を取りたがる。これは習性で、その習性に乗っかって我々新聞記者も職業として成り立っているのかも知れない。マスコミからミニコミに至る数多くの情報が氾濫している裏には、脅威、不安を皆感じているということがあるのではないだろうか。

## 一、情報を隠しきれない時代

最近の状況で、目に見えない脅威や不安の広がりを煽つていっているのは情報であるという問題がある。今までは為政者が情報をかなり隠すことができたが今は隠せなくなつてきている。ゴルバチョフは情報公開ということをして「グラスノスチ」という言葉で言っているが、大韓航空機撃墜の

時にCIAや自衛隊がソビエトに情報を取つていたという事実から分かるように情報が隠しきれない時代になっていくことは間違いない。しかし、問題は未だに情報を隠されると思つている人が世界にいろいろいることだ。隠せないやり方も隠せるやり方もあるが、社会が、一頃流行つた言葉を使えば「シートルート」というか、見抜ける時代になりつつある。為政者が情報を隠せなくなったと同時に、恐ろしいのは国民一人ひとりの生活も為政者側から見通せる時代になつていくということだ。毎日ダイレクトメールが届くが、そのリストの売買が大変な商売になつている。各社の社員名簿、人名録を集めて売るビジネスがある。社外秘と書かれた朝日新聞の社員名簿も一冊何万円とかで売られているらしい。このように実際のところはかなりな意味で世界中が覗かれている。我々は政府にもっと情報を公開するように言っているが、政府の方にもかなり私たちの情報が流れていると見ざるを得ない。日本はまだガードが強いほうかもしれないが、国によつてはこのガードが相当弱くなりつつある。国際情勢の上でもこうした点を根底に考えておかなければならないだろう。こういう時代になると時々笑ひ話

しのようなことも起こる。クウェート在住の日本人が外務省のアドバイスでバグダッドへ移る時に、そのことがマスコミで報道されるとイラク側の妨害があつて邦人に身の危険が及ぶから、報道を控えてもらいたいという外務省の働きかけが実はあつて、それは新聞や雑誌にも書かれた。しかし、日本のマスコミだけにそういう要請をしたからといって今は済む時代ではない。アラブの通信社やAPやロイターもある。ジャーナリストというのは世界の国境を超えており、情報を全部止めるということは殆ど不可能と見ていい。日本の新聞記者もコケにされたものだという話しも出たが、最後には既にホテルへ移つていた大使館員が最後までクウェート大使館を守つていたという美談まで伝えられたが、ホテルへ移つたことをアメリカのCNNに報道されてしまった。そうなるからこそに情報のギャップが生まれてくる。日本の報道と外国の報道が違つてしまふと日本の外務省は都合の良いことしか言わないではないかという隠蔽騒動にまでなつていく。情報には立場や分析もあるが、今日のようにあちこちから全部覗かれていく状況になると、このような問題はこれからも次々と起こってくるだろう。情報

コントロールは昔よりも難しくなりつつあるし、それを見抜くために国民の方のガードも強まっていくだろう。国際情勢とか歴史は人々が書くものだから、一人ひとりの動きがそういう不安の固まりになり、シーソーの社会になってきた時、心の問題、目の見えない、非具象的な動きが今まで以上に国際情勢を動かすフアクターになっていくだろう。

### 三、激動の時代に「不易」を見抜く

次に、これから国際社会の新秩序の一つの流れは、今までの東西関係から南北関係へより強まっていくであろう。これが第二の視点だ。東西関係に関しては、少々体制批判をする「あいつは赤だ」というレッテルを貼る思想が物事を水平的に考えがちにしてきた。「左だ、赤だ、右だ、ファッショだ」という言い方、考え方が大きな意味で国際情勢を動かしてきたし、国際情勢を報道する人々の文章にもそういう態度が出ていたと思う。人間の思考はある時は左、ある時は右にも行く。イデオロギーだけで割り切れるほど人間は単純ではない。中には戦争中右翼の政党を作りながら、戦後は民主主義の旗手として今やノーベル平和賞の候補に

まで自ら名乗りを上げる人もいる。それも一つの才能だと思おうしそういう人を否定する気はないが、我々が見る場合そう簡単にはいかない。これからは南北関係が大きくクローズアップされていくだろう。先進国は第三世界から資源ばかりとっているうちに、輪廻の思想に近いエネルギー生態系、政治的な生態系の法則によって必ず没落する時があるだろうという予言を学者や哲学者が何年も前にした。クウェートの石油収入とフセインが攻めていった関係は南北問題ほど簡単ではないかもしれないにしても、持てるものと持たざるものという認識は持っていた方が良いのではないか。持てる国に對する持たざる国の視線は年々熱くなっていくだろう。日本は今持てる国の筆頭に挙げられている。どんな政治行動や外交行動をとっても批判が出てくる。政治や外交が納得できるかという論議を日本国民が責任を持つていくという姿勢が必要だ。持てる国のトップになってきた過程で、資源はあるが技術のない国や第三世界といわれる国々の犠牲と支援なしに日本の現在ではなかつた点は忘れてはいけない。

南北問題はより深刻さを増すだろう。そこで日本の経済力を非軍事的

な方法で活かしていかなければならない。日本の殆どの行動に対して批判が出ることは逃れられないと思う。いい子になるよりも批判が出てくるところを突き抜けないと新しい歴史のページは開けない。人類の歩んできた歴史を見るとそういうことの繰返しは歴史の節々で起こっている。激動に見えの中に動かないものがある。禪に「不易(変わらないこと)流行(うつり変わること)」という言葉がある。不易の部分と流行の部分を見抜くことが一番大事だ。

一つの単語の語意がどういう風に捉えられるか、人々の反響がどうなるかということも問題だ。自民党の長崎市長が言う平和と共産党の長崎県委員長が言う平和では同じ「平和」でもどういう意味でとるかによってかなり違ってくる。例えば「平和」という言葉の多面的な意味の見極め方が意識的、無意識的に問われる時代がくるだろう。イデオロギーという問題よりも、持てる者は持たざる者の位置を見方をずらした方がこれからの世界秩序が見えるようになってくるのではないかと感じる。

### 四、時代を動かす「ものの弾み」

第三の視点は非科学的だが「ものの弾み」ということだ。弾みがつい

## 「MRAの歴史」のビデオ<sup>(ベータ)</sup>(VHS)

頒布中

頒価2,000円(送料込)

詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

03(821)3737



たら恐ろしいということが最近顕著になってきていると思う。ドイツがこんなに早く統一されるとは思ってもいなかった。東欧の国々がこれだけ共産党離れ、モスクワ離れをするとは思ってもよらなかった。冗談で東ドイツの外交官たちに、ドイツ統一がなったら対等合併ではなく吸収合併で職を失うのではないかと言っていたら現実にそういう事態になった。モスクワ大学で勉強し、日本語も非常に上手いエリート黨員ですら行く所がない。殆どが日本の企業に就職した。一等書記官で東独大使館にいた人が小さな会社の国際担当要員になったと大阪の新聞に載っていたが、落差が激しいのに驚いた。ゴルバチョフも世界で起こった一つ一つのリアクションを全部手のうちに分かっていたとは思えない。あるものの反応が起こった時に人間は反射をするが、これが全部そういう形で起こったとは思えない。個人や一つの国だけでは対処できない「ものの弾み」というものがあるということ

を教えている。

最近の例としてはサッチャー首相の退陣がある。大変な勢いでやってきた方だし、まだまだ若い。十一年半やってきただけでも奇跡に違いない。しかし、これも一つの弾み。ず

つと止まるころのなかったサッチャー首相が突然辞任した。本当か嘘か知らないが、打ちひしがれ叩きのめされた妻の顔を見るに忍びないから、今栄光のあるうちに辞めると最後は夫のデニス氏が愛する妻に話したことが引き金になったという。サッチャー哲学からいけば、こんな

ことに負けていたら世界は直らないというのが普通だった。サッチャーはイギリスの文化というよりも世界の一つの流れに乗ってきた人だから、大きなうねりがサッチャーを追いやった。これが弾みではないだろうか。このうねりの高まりで、寂しいかな皆消えていってしまう。物分かりのいい人ばかり残ってしまう。現在の指導者の中でゴルバチョフは最も物分かりのいい人物だ。ある酒席で新聞界の幹部の一人が「ゴルバチョフはCIAが戦後四十周年かかって懸命に育て上げた最大の産物である。CIAが長いこと工作して丹念に育て上げた者として見ると世の中のととは大分分かる」と言ったら、他の人が「キッシンジャーがベトナム和平を進める前後ずっと見ていて、彼をKGBが長いことかけて送り込んだ男だとすると大分良く分かる」と冷やかすというやりとりがあった。ゴルバチョフがああいう格好で出て

きたことについての説明は従来の思考ではできないから新思考というのかもしれない。時代の流れのスピードというものが一つの勢いでうねってくる時期を見ることが必要だろう。

## 五、時代の流れを作る力

ヨーロッパ統合は人類が生んだ大変な考えだ。ヨーロッパ十二カ国はこれまで日本に対する輸入制限の問題を一国毎に交渉していたが、上手くいかないの束になった方がいという知恵を出した。日本の昔話の「三本の矢」のような発想が欧州統合だ。不易と流行の不易の部分が現代に適應されている好例だろう。それを社会学者たちは皆、国家安全保障の新形態とか新しい国家統合論とかいつているが実際には何のことではない。「三本の矢」的発想に違いない。ヨーロッパのパスポートは一つになるがフランス語が消えて英語だけになるということではない。民族問題が次々と起こってくるのは人々が存在理由「アイデンティティ」を求めようとしている現われだろう。「大きなうねりが来た時には流れが強いから闘ってもしょうがない、サッチャーですら敗れたではないか」といって、流れに任せて極楽とんぼでい

くという発想は間違いだ。そういう発想へひきずり込もうとしているのが最近の世紀末時代の大きな特長だ。人類の進歩のかなりの部分は大きな流れに身を任せなかった人々が作ってきた。私たちにとって一番大事なのはその流れがどこへ行くかという認識である。

その流れを戦争で解決する方法は常にある。戦争は国民の団結にはもってこいだ。流れは軍事的でない手段で変えていかなければならない。そこに日本が新しい方向を見つめる方法があると思う。日本の経済力は大きな力だ。世界はこれを大きなうねりだと思っている。世界の流れに流される日本ではなく、大きなうねりの主体に日本がなっていることを常に思っていなければいけない。日本で一番優れているのは土農工商という概念の商の人々で、今なお少し下だと控え目になっているこの謙虚さが日本の新しい方向を支えている。この序列が本格的にひっくり返った場合日本は一種の大きな革命になると思う。恐らくその時には新しい秩序というのは持てないのではないかとぼんやり思っている。今言えるのは土農工商の商の方々が我慢をして謙虚であることが評価されるべきだということである。選挙の度に自分

の父親よりも年上の経団連の偉い人を全部呼び付ける若い自民党の幹事長から、「お前の所は何億出せ」と言われてもじつと黙って耐える。こういう凶というのは今のような解釈をしないと良く飲み込めない。明治維新の時から作られたその枠組みの中で、大きな力となつてきている時にそういう序列のもとで頑張っているという事実は忘れてはいけないだろう。

## 六、変化に伴う不満の調整

今日本が関係する外交だが、多国籍軍に対する貢献でも、20億ドル、40億ドル、70億ドルという金の話しが出てくる。北方領土もいつそのこと買ったかどうかという話しが出てくる。北朝鮮(朝鮮民主主義共和国)に対する償いは70億ドルでは済まない……つまりお金の話しが政治家の口からばんばん出てくる。日本が国際的な新秩序にかかわっていく過程で、不満が国内に満ち溢れてくることにならないかと恐れている。一番恐ろしいのは日米関係に象徴される

国家間摩擦への日本人のナショナルリズムをどの辺で落ち着かせるかという問題だろう。「NOと言える日本」という荒っぽい本が出て、「アメリカ人はあれを読んで怒った。日本では誤訳だと発言しているがそんなこと

はないと思う。素直に読めばアメリカ人にとつて恐るべき本だと思うだろう。あの本の根底にあるものは日本がこれだけ偉い国だという世界的基準を作つて欲しいという勢いだ。基準をどこに置くかということが自分たちと違う時憤りとなる。これだけ自分たちが努力して我慢しているのに、まだ分かつてくれないという感情が一番恐ろしい。普段は柔和な人が抑圧され、なめられ続けるとある日突然人間が変わつて爆発するというのが恐ろしい。本当に努力しているのに分かつてくれないと国民が焦り出した時、一部の人が跳上りと言つては語弊があるが、突出する状況にならなければよいと思う。日米関係はそこまでは行つていないと判断しているが、行かないという保証は絶対がない。政治家にとつて必要なのは国民の感情、世界の人々の日本を見る目をいかに調整して紛争を解決するかどうか。

## 七、必要な民主主義の活性化

日本の政治家は率直に言つて不勉強だ。サッチャーが辞める時に、息子のように若いメージャーを支援しながら理屈をはつきりと自分で明快に言つた。日本では新聞に投稿する代議士は非

クタイムズでもワシントンポストでもオピニオンという欄に議員が意見を出す。国民の代表である議員の言つた言葉は非常に重い。朝日新聞には大学の教授の投稿や評論が多い。しかし大学教授は国民から選ばれた人たちではない。そこに民主主義の歯がゆさと新聞人としての淋しさがあふれる。国会議員が新聞に意見を出して欲しいと本当に思う。最近、在日米軍駐留費負担の問題について自民党と社会党の代議士が一人づつ朝日新聞に書いてくれたことが嬉しかった。アメリカ人でもイギリス人でも、議員の書いたものは信用する。イギリス人でもアメリカ人でも日本よりある意味ではもっとドブ板選挙だ

が選挙民の心をよく知っていること、で国会議員が書いたものは信用される。大学教授は頭は良いがなかなか行動には結び付かない。日本では日本やフランスが最たるもので、物凄く勉強をする。だからフランスは次々とアイデアが出てくる。サミットとか欧州の通貨連合とか誰も今まで考えないような新しい制度、仕事をフランス人が中心となって生み出して行く。日本でも国会議員を懸命に支えているのは官僚だ。その官僚たちが教わっている大学

偉くなる。「空論」と言われる頭でかちの論議は実際には地に足がついていないから言えるのであつて、実際の政治を動かす人々が、自分の姿勢で語つていかなければ、自分の力でなく論争や主張の場を提供できないようにしなければ、微力だし、新聞も競争の分野があつてそういう点では私たちに對する試練が強まるであらうと覚悟はしている。

高温革命と低温革命というのがあるとイギリス人は言う。高温革命というのは軍人が起こして血が流れる革命で、低温革命というのは政治家や官僚が中心になつて革命だと思われぬ形、で流れを調整していくのだという。最近はその主流になつていく。デタントが根底にあつてアメリカとソ連が対立していない時にはそういう状況が生まれるが、その下で抑圧されているところが一部に見られる地域紛争の激化という形でホットに増えていくと思う。これが今後危険な部分になるだろう。日本が持っている規範というものが普遍的なものであることを希望するが、世界は簡単ではないので短絡的な思考でない形で地道に世界の規範とのギャップを埋めあう仕事が必要だと確信する。



## 戦争の向こう側に世界の相互理解を築く仕事が残っている



●フット女史(左)と談笑するカリス・ワデイ博士

ことから民主主義がスタートします。そのためには私たちの良心の覚醒を図り、物事への関心をさらに広げ、日々心を新たにしていかなければなりません。

民主主義はただ傍観しているだけでは進みません。それは私たち一人ひとりの足元から始めていくものだからです。

※詳しい案内を5ページに掲載しましたのでご参照下さい。(会議案内状より)

湾岸戦争が勃発した日の晩にロンドンのMRAハウスで開かれたカリス・ワデイ博士著「モスレム・マインド(イスラムの思考)」改訂版出版記念パーティーには、パキスタン前首相ベナジール・ブット女史(野党パキスタン人民党総裁)やユフマン・カーン駐ロンドン大使を初め、学者や大学教授、地域の有力者、そして英国の百八十万イスラム教社会を代表する人々が出席した。オックスフォード大学アラビア・ヘブライ語学部を卒業した最初の女性であるワデイ博士は、これまでの自分の長い人生の中で体験したこと、特に世界が戦争に直面していた時の思い出を語った後、次のように述べた。

「戦争が終わった時には皆疲弊していたことは確かですが、復興への希望があったことも覚えています。そして問題は誰がそれを取り組むのかという

ことでした。

一つだけ確かなことは、人類の直面する貧困、飢餓、疾病、負債や憎しみ、略奪という様々な問題は、人々の傷ついた心の中に存在する残酷性と貪欲によって来週も来月も、そして来年も繰り返されるということです。湾岸戦争の結末がどの様なものになるにせよ、戦争によってこれらを解決することはできません。賢明なやり方で徹底的に、そして慈愛を以て早急に問題解決に取り組むべきです。今、誰にその用意があるのでしょうか？

異なる宗教を信仰する人々の間の橋渡しが、これまで以上に重要になってきました。恐れや誤解はありませんが、異なる信仰を持つ人々の寛容の度合いは広がっていると信じています。例えば、湾岸問題の緊迫化は多くの西洋人のイスラム社会に対する関心を深めました。友愛と相互理解の道を敢えて進むもうとする人たちは、自分たちが大海の僅かな一滴ではなく押し寄せる未来の潮の一部であることを知るべきです」。

続いて、ローマカトリック教会と英国イスラム社会の指導者から、異なる宗教を信ずる人々の相互理解を推進する博士の貢献に対する感謝の辞が述べられた。チャールズ・ヘンダーソン主教(ローマカトリック教会、他宗教に関する全国委員会委員長)は、「博士は友情を通じて橋を築く啓発的なアプローチの方法を私たちに示した。障壁を取り除き友情と平和の橋を築くために他の宗教へアプローチするという私たちの教えを、より多くの教会のメンバーが理解してくれることを強く希望する」と語った。

カトリック教会も「全ての宗教が持っている純粋な核心の部分は尊重されるべきであり、全ての主要な宗教は私たちの心の琴線に触れる基本的な原理を持っている。偏見はあなたの心を閉ざさずだろう」と明言している。

この本を出版したグロブナーブック社のヒュー・ノーウェル会長は、「戦争の向こう側に世界の相互理解を築く仕事が残っている」と述べたが、これこそ今回改訂版が出版された理由である。同氏は、パキスタン・イスラマバードの国際イスラム大学学長モハメッド・アフザル博士がワデイ博士に宛てた書簡の中で「豊かな知性と精神を伝えてくれたこの本に感謝の意を尽くす適切な言葉が見つからない」と述べたことを紹介し、「モスレム・マインド」が、ウルドゥー語(パキスタン公用語)やヒンディー語(インド公用語)、そしてソ連中央アジア各地域の言語に翻訳される必要性を強調した。

## ナイジェリアMRAチーム 大学に新風を吹き込む



●ナイジェリアMRAチームの若手メンバーたち(コー世界大会で)

ヤバ工科大学学長のフィリップ・アデビレ博士の自宅で開かれたクリスマスパーティーの席で、「最近、MRAはどんな活動を行っているのかね?」という博士の質問に、「実際にMRAハウスを訪ねて自分の目で確かめて見たらどうか」とナイジェリアのMRA関係者の一人である弟のピーコン・サンデー・アデビレ氏が答えた。これがきっかけとなり、博士夫妻が八人の子供たちを連れて首都ラゴスのMRAセンターを訪ねることになった。

家族全員でMRAの映画「最高の経験」を見終えた後、博士は「この素晴らしい映画が伝えようとしているメッセージは、まさに私の大学が現在必要としているものだ」と感嘆の声をあげた。以前から学生たちの夜間の集団不良行為や暴力沙汰の増加に頭を悩ませていた博士は、全学生にこの映画を見せたいと思い、先ずMRAチームを大学に招請した。この映画の持つ真実と深みが、大学に新しい精神を吹き込むことに役立つと博士は考えたのだ。

数日後、博士は先ず学生たちの非政治的の社会奉仕活動クラブであるDATUMのメンバーに映画を見せて学内で宣伝してもらいたいと考え、三十三人のメンバーをMRAセンターにバスで派遣した。映画の後、MRAの若手メンバーによるセミナーが開かれ、彼らの社会貢献への決心や決意が披露され

たが、DATUMのメンバーたちは強い関心を示し、MRAを病める現代社会の治療薬とさえ考える人もあり、活動への係わり方を尋ねた。全学生にこの映画を見る機会が与えられるべきだと全員が確信し、それから一週間にわたりキャンパスで映画の宣伝に務め、仲間の学生たちに映写会への参加を呼びかけた。

一月二十四日にヤバ工科大学で開かれた映写会には、約三五〇人の学生と数名の大学教職員が参加した。上映後、博士は大学に新しいメッセージを運んでくれたMRAに対する感謝を述べた後、学生たちにこのメッセージを受け容れ、日常生活に活かしてほしいと訴えた。「学内に既に良心の軍隊が組織されつつあり、戦いが勝利に導かれることをMRAの皆さんに保証したい」と語り、学内に清廉で規律の取れた若者たちのグループが作られるきっかけを与えてくれたMRAに対する感謝の気持ちとして千ナイラ(ナイジェリア通貨)を寄付することを発表した。今後とも良きパートナーとしてMRAに協力していくことをDATUMも表明した。

ベルリン(ドイツ)

## アメリカから受けた恩を ソ連に返すドイツ



マイケル・ヘンダーソン  
(ジャーナリスト・イギリス)

# Second Opinion

歴史の皮肉な巡り合わせという言葉があるが、次に述べることこそが正にそれを証明する実例だろう。

一九四八年六月、ソ連軍によって西ベルリンへの電気の供給が断たれ、西ベルリンと連合軍占領地域を結ぶ道路と鉄道網が切断させられた時、アメリカは西ベルリン市民を支援するために航空機による物資の空輸を決定した。以後十一月間に延べ二十万機が、食糧、衣料、燃料、その他の物資二百万トンを空輸した。その費用二億ドルはアメリカ国民とイギリス国民の税金によって賄われた。後に、西ベルリン市民に対するさらなる虐待であり、自由の誓いへの新たな試練となるベルリンの壁が築かれた。

西ベルリン市議会と西ドイツ政府は、再びこのような封鎖が西ベルリンに対して行われても耐えられるように、六カ月分の食糧と三カ月分の物資を緊急用備蓄として準備した。市内の運河沿いの巨大な倉庫やサイロに莫大な物資が貯蔵された。

五億マルクに相当するその全てが、過去四十年間にわたり西ベルリン市民の生活を圧迫してきた人々、つまりソ連人たちに無料で引き渡されつつある。「ベルリン市議会及び連邦政府“備蓄品”と呼ばれるこれらの物資には、ライ麦六万六千トン、コンビーフ二万六千トン、砂糖一万九千九百トンからトイレットペーパー三千二百五十トン、洗剤二千トン、マッチ二百六十九トンに至るまで、あらゆるものが含まれている。

このような政府の行動と並行して、ソビエト市民に対する大規模な民間援助活動が組織されている。最近ドイツを訪れた時、ホテルや政府関係機関、商店などあらゆる場所で、「ヘルプ・ロシア(ソ連を助けよう)」と書かれた箱やコンテナ、瓶などを目にしたし、新聞、テレビ、ラジオも一丸となり大規模な支援キャンペーンを行っていた。ちょうど第二次大戦後にアメリカがヨーロッパに「ケア(支援)小包み」を送ったように、ドイツがソ連に対して同じことを行っている。

その殆どは、東西ドイツの統一を支援してくれたゴルバチョフ大統領に対する感謝の意の現れであろう。そして、既に指摘されてきたように、無意識の優越感、或いは忌まわしい過去の捉われから脱却したいドイツ人たちの願望が幾らか混じっているのかも知れない。しかし、訪問者である私の目には、様々な国内問題を抱えているにも拘らず、他者に対する自発的な支援の波が広がるドイツの姿は、助けを必要としている人々に対する彼らの寛大さを見せられたようで大変印象的だった。

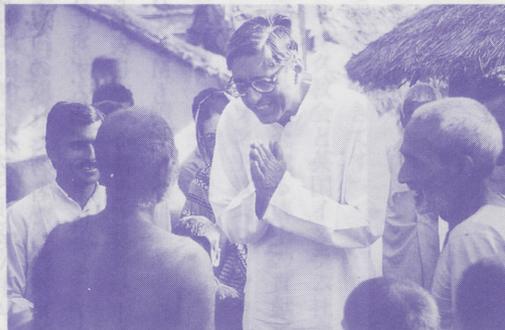
勿論、これまで彼ら自身が恩恵を受けてきた連帯意識というものを他の人と共に分かちあいたいという願いをベルリン市民が持っていることは確かだろう。

ベルリン市長の側近は私にこう言った。「かつて自らも助けを必要としたので、その大切さはよく分かっているつもりです。アメリカが私たちを助けてくれたように、今、私たちがソ連を助けようとしているのです」。

マイケル・ヘンダーソン氏コラム「セカンド・オピニオン」より(フォー・アチエンジ二月号)

ロンドン(イギリス)

## MRAビデオ「真実との出会い」 ロンドンで初公開



インド独立の父マハトマ・ガンジー翁の直孫ラジモハン・ガンジー氏(一九三五年 ニューデリー生まれ デリー大学経済学修士)は二十一歳の時、パリのある駅のプラットフォームでMRAの創始者フランク・ブックマン博士に偶然出会い、僅か十分間の立ち話で「祖父の遺志を継ぐのはこれだ」と心を決め、その後、博士と共に世界各地で平和活動に従事した。昨 year 上院議員に任命されるまでは週刊誌「ヒンマット」編集長を十六年間務めるなどジャーナリストとしても活躍してきた。

彼はインドの発展の大きな障害となっている汚職の追放に政治家として取

り組んでいる。八八年秋には、外国人を含む約百名から成るM R Aのグループと共に「ヤトラ」と呼ばれるキャンペーンを行った。「ヤトラ」とはヒンディー語で「長い旅、魂の旅」を意味し、ガンジー翁の生地であるグジャラート州を八日間にわたり回り、ゆかりの深い都市の団体、学校等を訪れ、よりよい社会造りのための協力を呼びかけた。ガンジー氏は、正直で清潔な社会造りと貧しい人々の救済とを訴え続けている。

ロンドンのM R Aプロダクションは、ガンジー氏がインド首席代表として参加した国連人権会議の取材や、数々のインタビューを中心に約四年の歳月を費やしてこのドキュメンタリー・ビデオを完成させた。

「エンカウンター・ウィズ・トルース（真実との出会い）」というこの作品は、去る一月二十一日（月）と二十二日（火）に、ロンドンのウエストミンスター劇場に各界の代表を招いて公開された。

わざわざボンベイから駆けつけたインド古典楽器（竹笛）演奏家のパンディット・ハリプラサド・チャウラシア氏のコンサートが上映会に花を添えた。トップ・クラス音楽家であるハリプラサド氏のグループが奏するメロディーは、このビデオで示されたガンジー氏の問題解決へのアプローチと見事に調和し、ビデオの持つ精神的側面を際立たせた。

また、ニューヨークから出席したこのビデオのアメリカ側ディレクターのクレア・デビス氏は、

「国籍や人種、世代など多様性に富んだ観客が、これほどまでに熱心に鑑賞するのを見るのは初めてだ」と感激を語った。

多数の来賓の中には、サザビーズ（国際的な美術品オークション会社）会長のゴウリー伯爵の姿があった。数年前にウインストン・チャーチル国會議員（チャーチル元首相の孫）と一緒にガンジー氏と会ったことのある伯爵は、ビデオと音楽に感動し、ハリプラサド氏と活発に言葉を交わし、近い将来、初のインド訪問を実現させたいと語った。

湾岸戦争に関する国会論議の合間をぬって、ジム・レスター議員とシリル・タウンゼント議員も出席した。タウンゼント議員は、

「これほど素晴らしい竹笛の演奏は初めて聞いた。ガンジー氏のような鋭い感覚と明確な主張、思いやりを持った政治家をウエストミンスターの国会議事堂でも見たいものだ」と語った。

他にも、スイス、ホンジュラス、ドイツ、ガンビア、モリタニア、バルバドスなど多くの国々の大使や、中国大使館の一等書記官などが出席した。その感想の一部を紹介したい。

「この素晴らしいビデオをぜひ大使夫妻にもお見せしたい」

（ウガンダの外交官）

「ガンジー氏の啓発的なビジョンと思考に大変感激した」

（エチオピアの外交官）

「人々の心に橋を架けようというこの考え方は、よりよい未来のための唯一の希望である」

（リビア人芸術家）

「このビデオは何度見ても飽きることはないでしょう」

（ケニア人女性）

「素晴らしい出来映えだ。今日のような時代に重要な意味を持つ」

（アラビア・ブリティッシュ商工会議所、スレッシュ・サーナ氏）

また、インド人出席者にも感動的な反応が見られた。

一九五二年から五三年にかけてフランク・ブクマン博士がミュージカル「ジョサム・バレー」を携えてインド中部のアンドラプラデシュ州の州都ハイデラバード市を訪ねた時に、市の職員であり妻の実家が所有していた劇場でその劇が上演されたというカーン博士は、

「これまでに私が見たインドに関する映画の中ではベストだ。身震いするほどの素晴らしい四十分だった」と絶賛した。

ハリプラサド氏はロンドンのインド文化センターの後援を得て、五月に二十日間にわたりイギリス各地で公演を行う予定である。

ロンドンのクイーン・エリザベス・ホールでのコンサートを企画したインド人女性性は、

「全てのインド人にこの映画を観てもらいたい。イギリス国内でのビデオの販売を喜んでお手伝いします。決して売名行為ではないからこそガンジー氏のメッセージが鮮明に伝わってくるのです」と述べた。

ニューキャッスルなど地方都市でのビデオ上映とハリプラサド氏のコンサートとのジョイントをという同センターの提案に対して、同氏は

「いつでもどこでも私が必要とされるならば喜んで引受けたい。私は皆さんの家族の一員ですから」と語った。

（このビデオに関するお問い合わせは事務局までどうぞ）

# 湾岸戦争に関する緊急アピール

この緊急アピールは、平成三年二月二十三日に全郵政会館に於て開催された第十四回通常総会で出されたものである

(アピール)

## 平和の受益者から貢献者への転換をはかる国民運動を

「戦争とは国のエゴが支払う代償である。平和とは戦闘の存在しない状態ではなく、人と国とが交わる時に実現する」(フランク・ブックマン博士)

湾岸戦争がわが国に突き付けているのは、平和の受益者日本が、平和に対する貢献者への転換を果たせるか、という根本的な問いかけである。和平も間近に迫った今こそ、その和平を裏切るものにする積極的な貢献が果たせるよう国民一丸となった行動が求められている。

日本は、反戦平和、即ち戦争に反対し参戦しないだけでは戦争を防止できないばかりか、平和の一方的な受益者に止まっていることが諸外国の信頼を失う所以であることをまず認識する必要がある。その上で、下記のような戦後処理と復興開発援助に独自の貢献を目指すべきである。

### 1. 紛争関係諸国民の相互交流の推進

第二次大戦後日本は、連合国側指導者の決断で、国の分割や多大な賠償負担を免れ、米国の復興援助と農地解放等の抜本的な社会改革をベースに平和国家としての再生を果たすことができた。日本は改めて関係諸国への感謝を表明する一方で、敗戦国としての経験と反省に基づく戦後処理構想を各国に提案し、和平の環境作りを推進すべきである。第二次大戦後フランク・ブックマン博士は「ドイツを抜きにしたヨーロッパの再興はない」としていち早くドイツに手を差し伸べた。今、イラクの国民が独裁者や交戦国への恐れから解放されて廃虚からの再建に打ち込めるよう支援することが必要である。

このためにも、日本は湾岸戦争終了後全ての関係諸国民の相互訪問を企画し、信頼関係の醸成に努めることができる。対日講和条約1年前の1950年には、広島、長崎両市長を含む各界70名の日本人がスイス、コーのMRA世界大会に招かれ、その帰途訪れた米国の上下両院で北村徳太郎、栗山長次郎の両国会議員が謝罪し、日本の国際社会復帰の端緒を開いた。世界がアラブ民衆の真情に耳を傾け、イラク国民の国際社会復帰を歓迎することが紛争再発防止の安全弁となろう。MRAとしては、コーの世界大会を初め、各国のMRA会議にアラブの人々を招いて、和解をもたらす対話作りを始めることができよう。

### 2. 中東復興開発協力隊(仮称)の創設

復興開発援助では、関係諸国の戦災復興に加えて、中東の経済格差を是正し、軍備にとって代わる中長期的な経済開発を包括的に担う「中東復興開発協力隊」(仮称)の創設を提案する。紛争の解決に血を流す貢献をした諸国や犠牲者に報いるためにも人的中心の貢献が最も相応しい。このプロジェクトと人材選考は、相手国に役立つことを第一義とする。青年海外協力隊OBや民間援助団体等を含め技術や経験をもった人材を幅広く募るべきである。特に開発援助には、企業や労働組合からのボランティア派遣を強く望みたい。日本たたきの可能性もあるこの時期に、平和の最大の受益者でもある日本企業が「有事の企業市民活動」として商売抜きで尽くすことが象徴的な意味を持つ。派遣を促す免税措置、人事・給与体系面の配慮、再雇用策の整備も重要である。これら目的別に編成された協力隊の各グループは、それぞれが対応する国際機関や外国機関とできるだけ共同で職務にあたるのが望ましい。経験やノウハウ不足を補うと共に、日本に格別の野心がないことを明らかにするためである。

こうした貢献を可能にするには、これまでの「一國平和主義」的な国民意識、企業行動、政治、行政、教育の仕組み等を変えることが不可欠である。国民一人一人がそれに伴う犠牲を甘受し、責任ある行動をとるときに、わが国は「ずるい日本」のイメージを返上して、「貢献できる日本」への改造をとげることができる。こうした動きに多くの国民各位が賛同し参加されることを、ここにアピールするものである。

平成3年2月23日

(社)国際MRA日本協会  
会長 住友 義輝

## 逆境を克服する心

いち  
一日本人の生きてきた道

住友生命保険相互会社 相談役名誉会長

## 新井 正明



(あらい・まさあき) 大正元年生まれ。昭和12年、東京帝国大学法学部卒業後、住友生命保険株式会社(現住友生命保険相互会社)入社。翌年応召され、ノモンハンで負傷し、片足を切断。昭和15年、会社へ復帰。労働組合委員長、人事課長、総務部長、静岡支社長等を経て、昭和41年、取締役社長就任。現在、取締役相談役名誉会長。他に、大阪防衛協会会長、関西師友協会会長、住友病院理事長、松下政経塾理事長等、多数の団体、会社の役員としても活躍中。

## 一、ノモンハン事件で負傷し、片足を切断する

本日は、幼い頃から様々な方から教えて頂いた言葉を幾つか並べて、私が今までの様な考え方で生きてきたのかお話ししたいと思います。私は今まで五十二年間隻脚(せつぎやく)人生を送ってきました。住友生命入社当時は五体満足だったのですが、九カ月後に召集され昭和十四年八月二十日

ノモンハン事件でソ連軍の砲弾を浴び全身に怪我をしました。最もひどかったのが右足で、二十七日に切断を余儀なくされたのです。

昭和五十年に第七十三回芥川賞を受賞された林京子さんの「祭り」は、被爆した長崎の悲惨な状況を書いた作品ですが、その中に「人間は両手両足を揃って、目も鼻もあるのが最も幸福な状態だ」と書かれています。それによると私は、不幸だと

いうことになりましたが、私、こんな体になっても命があるので、有難いことだと常々思っております。怪我をして、ハイラルの陸軍病院に収容された私はガス壊疽に罹っているの、腰の関節から外してしまわなければならぬというのが軍医の診断でした。ところが幸いなことに病院長が最終の診察をして、腰の傷はガス壊疽に罹っていないから残してやれということ、それを免れることができました。この診断が私の運命を変えたのではないかと思います。もし、腰の関節から外されていたら、無論義足を付けて歩くことは可能ではあったでしょうが、元の職場に戻って今のように毎日働くことができ、海外にも赴き全国各地を訪れるなどということとは不可能だったと思います。まったく院長先生の診断のおかげです。

「両手を失いながら、口で筆を使って立派な絵を描いている大石順教さんの「手がなければ足を使わない仕事を、足がなければ手を使わない仕事を、手がなければ足を、足がなければ手を、足がなければ手を使わない仕事をやればよい。手は借りることができないが、人格は借りてくることはできない」という話や、両手片足を切断した人の「私を紙に例えるなら三つの角がない紙だが、中がきれいならば何かのお役に立つだろう」というような話を病院で聞いて、形は不自由でも心は大事にしなくてはいけないということを学びました。その当時私に影響を与えて下さった人々の中に北澤敬二郎さんという専務取締役がおられました。当時、住友生命には社長制がなく、一番偉いのは専務の北澤さんだったので、北澤さんはわざわざ大阪から東京の陸軍病院まで見舞いに来て下さり、「お前は遅く出勤して早く帰ってよい。だから早くよくなって出て来い」と、たった九カ月間ただけで海のものとも山のものとも分らない男に対してこの様な言葉をかけて下さったことに大変感激しました。その後、退院して会社に戻ったのですが、まさか北澤専務の言葉に従うこともできませんので、できるだけ早く出社し仕事が多い時は遅くまで残ることにしましたが、職場復帰ができたのは北澤専務のおかげです。私が昭和四十一年に五十三歳で社長になった時(当時の住友連系会社の中で最年少の社長)に、その頃大丸百貨店の会長をしておられた北澤元専務をお訪ねし、「今日の自分があるのもあの時のお言葉のおかげです。今後とも宜しくお願いします」と挨拶しましたところ、北澤さんは「私が他に何を言ったか覚えてるか」

と言われました。当時私は北澤さんから隻脚の著名人として大隈重信や重光葵、永井柳太郎、中野正剛といった名前を出されたのを記憶しておりましたが、大隈さんは外務大臣の時、重光さんは公使の時に中国で負傷しているのです、入社九カ月で怪我をした自分とはレベルが違うと思っ  
ていましたが、それらの人の名前を申し上げると「覚えていければよろしい。五十三歳の社長といってもそんなに若くないぞ。自分が住友生命の専務になったのは四十六歳だった」と言われてしまいました。

## 二、中学の恩師、林古溪先生に師事する

子供じみた話と思われるかも知れませんが、私が小学校から大学までの間に教わったことの話をしてみたいと思います。私が小学校に入学したのは大正八年ですからいぶん古い話になります。群馬県の山の中の田舎の小学校で、お正月には書初めを書いて知人、親戚に配る風習がありました。一年生のときには「ツルカメ」二年生では「人は一代、名は末代」というのを書いたことを覚えておりました。その時書いた「人は一代、名は末代」という言葉が心に沁みましました。今でこそ名を末代に

残そうというようなことを言う人は殆どいないと思いますが、人は一代だけが末代まで汚名を残してはいけない、恥ずかしい行動はしてはいけないということだろうと私は理解しております。

その後、戦争で負傷してハイラルの陸軍病院に収容されていた時、包帯の交換の際、ガーゼが傷口に貼り付いて、取り替える時大変痛いのです、余りの痛さに唸ったり泣き叫んだりしそうになる時、ベッドにしがみついて汗を流して耐えていたそうです。あの時、君が我慢している姿を見て、看護婦さんが涙を流していたとあとで上官が教えてくれました。城山三郎さんの「毎日が日曜日」という小説には交通事故で足を切断された息子の話が出てきますが、ガーゼや包帯を交換する時の描写が実にリアルに書かれています。城山さんとお会いした時そのことをお話しすると、「え、あれより痛いのですか」と仰っていました。結局女々しいことをして名を汚してはならないというところで、子供の頃の書初めの言葉が私の心の支えとなっていたのだらうと思います。

次は「一つ、人のお世話にならないように、二つ、人のお世話をするように、三つ、その報いを受けない

ように」という言葉を紹介したいと思います。大正十三年に私は上京したのですが、その翌年の二月に後藤新平伯爵（元台湾総督府民生局長、元東京市長）が、私の通っていた小学校に來られ、ボーイスカウト総長として訓示された言葉です。つい最近、ある雑誌でそのことを後藤伯爵のお孫さんである鶴見和子さん（上智大学名誉教授）が「おじいさんの思い出」として随筆に書いていました。お世話にならないようにと思っ  
ていても、実際には様々な方々の世話になっていきます。人のお世話をしているかどうかは分かりませんが、小学校六年生の時に聞いたこの言葉が生涯忘れられません。

中学生の時には、「骨を惜しむな、気を付けろ、気をきかせろ」という林古溪先生の言葉が心に残っています。林先生は「浜辺の歌」の作詞で有名ですが、私が通った中学の国語、漢文、作文の先生をされてました。その容貌から林先生は悪童たちから「だるま」とあだ名されてました。

「だるま」とあだ名されてました。私が、私はその「だるま」さんに良い点をつけてもらえませんでした。今の私は声大きい方ですが、子供の頃は声も小さく引込み思案で、国語の授業での朗読では「おまえの声は聞こえない。もう一度読め」と叱

られてばかりで、父兄会から帰ってきた父に「林先生はおまえのことを誉めていなかったぞ」と言われてしまふ始末でした。

やがて林先生は旧制松山高等学校に転任されましたが、去られたあとで「先生はなかなか偉かったんだなあ」と子供心にも分かり、夏休み等に先生が帰京された時にはお宅に遊びに行きました。この林先生が「骨を惜しむな、気を付けろ、気をきかせろ」と言われていたのです。しかし、中学三年生がそんなことを言われても正直なところピンときませんでした。また「だるま」さんがいつもの三ヶ条を言っている位にしか思わなかったのですが、時を経るにつれてその意味するところが分かっていき、それから、先生がお亡くなりになるまで師事させて頂きました。

## 三、美しい花を見て、生きていく喜びをかみしめる

次に、「男に惚れられる男になれ」という言葉を聞いたのが、東京府立一中の補習科に通っていた頃でした。その学校の校長先生は、「訓辞は立派に原稿に書いたものを話すべきだ」ということでいつも原稿を手持って訓辞をされてました。その先生の訓辞の中に「頭山満翁はいいまし

た。男に惚れられる男になれ」というのがありました。この言葉が大変印象に残りました。とうてい女性には惚れられる気遣いはいないけれど、男には惚れられる男になりたいなあという気持ちがあったためでありましょう。

昭和五年十一月十四日にライオン宰相とも呼ばれていた浜口雄幸首相が東京駅で凶弾に倒れた時に、「男子の本懐だ」と言ったことは有名ですが、反対党の政友会は「狙撃されて男子の本懐とは何ごとだ」と攻撃いたしました。その浜口首相は病床で、若い人たちに読んでもらうために「随感録」を書きました。当時の私にとつては為になることが書いてありました。例えば、「余の性格上の欠点は一々ここに言わぬけれども、多々あったのである。これらのことは親兄弟にも知れぬように、殆ど血の出る如き大努力をなして、自分自身これが矯正に努めた。而して、その努力にはそれぞれ相当の効果があつたのである。余の信ずるところによれば、人格は努力と修養によつて完成せられないまでも、少なくともある程度において向上発展せしめべきものであり、また向上発展せしめなければならぬものである。又、別のところに「平凡な人間が平凡なことをし

ておつたのは、この世において平凡以下のことしか為し得ぬことは、極めて明瞭である」と自分の経験に基づいた様々な言葉を記しています。

昭和六年に高等学校に入学しました。同級生には丸山真男君（東大名誉教授、日本政治思想史）や河野六郎君（東京教育大名誉教授、言語学）などがいました。河野君などは「ドイツ語の教科書など買つても無駄だ」と言つて私の教科書を借りて勉強し常に成績一番といった具合でした。生まれつき頭の良い男と一緒にいると、自分もしつかりやらなくては行けない気になるものです。また、高校の校長がべらんめえ調で話した「やりやあやれる、やる時にやあやる」という言葉が心に残っています。印象深く後々役に立ちました。

昭和九年に東京帝国大学法学部に入学しました。外交官から政界に入つて間もない芦田均代議士（後の総理大臣）が大学の講演会で、この年の入試の答案について触れ、「今年の入学試験に『学びて思わざれば則ち罔く、思つて学ばざれば則ち殆し』という題が出たそうだが、『学びて思わざれば、すなわち左傾し、思つて学ばざれば、すなわち右傾す。ゆえに我、中道を行く』という答案が一番良かった」と評されました。当時

は思想問題が非常に盛んな時期で、学生が警察に連行されることもよくありました。人間は書を読んでも思索しなくてはいけない。また、思うだけではなく学ばなくてはいけない。資本論を読んでも日本の国体を考えなければ左傾し、日本は神国だと思つてばかりいても勉強をしないで右傾する。だから、学習と思索との伴わざるべからざること、両方相またねばならないことを芦田さんが言われたのを覚えています。吉田松蔭は「孟子」をよく読み広く講義しましたが、それでも「孟子の書いていることの全てを信じ込んではいけません。昔の中国では通じたことも、今の日本の国体に照らし合わせるとそぐわないこともある」と教えました。

陸軍病院に入院している時に、こんな体で果たして仕事に戻れるだろうかと悩んだ時期がありました。「もう会社に戻ることはできないだろう。たとえ、戻れたとしても仕事はできないだろう」と会社に辞表を提出しました。ところが、北澤専務から「ゆっくり療養して、出てくるように」という電報が満州の病院に届きました。日本に帰ってきて牛込の陸軍病院に入った時、生きていた喜びをしみじみと感じました。母親は、よく生きて帰ってきたが生まれもつかぬ

体になつてしまつたと、まあ欲びと悲しみが一緒に涙を流し聊かしんみりいたしました。友人が見舞に来てくれて「靖国神社へ行かなくてよかったなあ」と言つてくれた時は本当に生きていてよかつたと思ひました。堀切君のお母さんが丹精こめたバラの花を見舞に持つて来て下さいました。花とはこんなに美しいものか、ああ生きていいことだなあと思つたことを今でも覚えています。

#### 四、武見太郎先生の思い出

花で思い出すのが、「喧嘩太郎」と呼ばれた故武見太郎先生（元日本医師会会長）です。初めて武見会長にお目にかかりましたのは会長室で、会長室には足の踏み場もないほどに数多くの本が積まれていました。柱に富岡鉄斎の絵が掛かってあり、それをお誉めしたところニコツとして、お前鉄斎の絵が判るかと言われ、鉄斎の思い出を話して下さいました。京都の女学院の先生をされていたお母さんの使いで富岡鉄斎先生のもとへ参つたところ、「五千巻の書を読まざる者はこの室に入るを得ず」という額があり、武見先生が「自分は五千巻を読んでいませんから中に入

れません」と答えたら、「お前は入ってよらしい」と言われたそうです。私はこの鉄斎の額のことが頭から離れず不思議に思っていたところ、京大の神田喜一郎教授の書かれた書物の中にそのことが書いてありました。それによれば、趙子謙の書いた元の額が大き過ぎるので、鉄斎先生が当時の有名な書家である山本竟山氏に依頼して小さい額を作り、それを玄関に掛けておられたそうです。

だから、武見先生のご覧になったのは、山本竟山氏の書だったと思います。また、十年ほど前に武見先生が大病され数回にわたって手術を受け、九十キロの体重が五十キロにまで減ってしまった時「九十キロあったから四十キロ減っても五十キロ残っている」と言っただけで済んだことはいいことと豪語しておられました。先生が「病後の夏」という随筆に、「入院している時に、色々な花を戴きましたが、花をこんなに美しいと感じたのは初めてです。普段から座敷に花を生けることはありましたが、如何に花が自分の生命と結び付いているかと考えたことはありませんでした。しかし今度は、花の美しさと人間の命とがつながっているという私自身の深い経験を受けたことは、私の一生にとって大きな幸いです。花によ

つてもたらされる病室の雰囲気は、患者に極めて和やかな励ましを与えらるものであり、花でなければできないことと私は考えます。また、見た目の美しさではなく、その花が放つ香りも新しい魅力を加えました」と書かれていました。

## 五、中国の古典を会社の経営に活かす

私の話に戻りますが、私の病室に丸山君から「Durch Leiden Freude」というベートーベンの言葉が書かれた葉書が届きました。片山敏彦先生はこの言葉を「苦難を打ち破って歓喜を勝ち取れ」と岩波文庫に書いていますが、私は「苦しみを通じて歓びへ」と解釈していいのではないかと思います。この言葉が、それ以来私の心の支えとなり、座右の銘となつていきます。

実を言いますと、片脚を失ってからの五十二年間、五体満足だった頃の爽快な気持ちになつたことではないのです。やはり痛いのです。しかし、その苦しみを乗り越えて歓びを見い出さなくてはいけません。苦しみなどないほうがよいと言う人もいますが、確かにその通りです。しかし生きていく限り苦しみはそう簡単にはなくならな

この苦しみを克服して歓びを勝ち取るというのが入院時代に芽生えた私の心の支えの言葉です。「どうにもならないことを忘れるのは幸福だ」というドイツの諺があります。安岡正篤先生は、「統・経世瑣言」の中で、「忘れるというのはまさに困ったことだが、如何に忘れるか、何を忘れるかの修養は非常に好ましいものである」と言われていました。忘れるなど言われることは多々ありますが、忘れると忘れること

は余りありません。私は確かにどうにもならないことは忘れなければならぬと思いましたが、と申しますのは陸軍病院で沢山の怪我人と昼間ゴロゴロしていますと、昼間は賑やかですから「あいつの方が俺よりも重いんだ」とか、重い奴は「お前、軽いじゃないか」といばつてみたり、強がりを言つたりしています。夜になると自分の脚が両方揃っている夢を見ます。しかし、目が覚めると現実とは違います。ようやく傷が治つて松葉杖で歩行練習を始める時本能的に両方のスリッパを探してしまうことが暫くの間続きました。過ぎ去つたことは忘れなくてはいけない、いくら思い悩んだところで元には戻らないと自分に言い聞かせても、例えば、病院で写真を撮つて

写真屋さん「写真を引き伸ばしませるか」と聞かれると「写真はいいから、脚を引き伸ばしてくれ」などと言う男もおりました。昭和二十二年九月一日当社は国民生命保険相互会社として新発足、四十四才の芦田泰三氏が社長に就任されました。昭和二十七年社長が住友に復帰してより社業躍進し、業界に確乎たる地位を築きました。私が社長に就任したのは昭和四十一年のことです。

社長に就任してどういふような会社経営をして行つたらいいかと考えた時に、かつて岸信介氏が首相に任命された時、伊勢神宮に参拝して、「貧乏追放、暴力追放、汚職追放」と言つたことを思い出しました。当時の日本は、今ほど豊かでありませんでしたから岸さんがそう言われたのだと思います。政治の目的というものは、政治学的には色々難しいものですが、非常に易しく言えば貧乏を追放するということは国を豊かにすること、暴力追放とは国を平和にすること、汚職追放は国を清潔にするということとでしょう。ベッドの上で安岡正篤先生の本を真剣に読んでいるうちに中国の古典に親しむようになりました。かつては入学試験のために漢文を学んでい

たようなどころがあり、返り点だとか送り仮名をどうつけるかとか、どう解釈するかということだけしか勉強せず、漢文の精神を読み取ろうとしたことはありませんでした。自分がどう生きていくかという問題に直面した時に論語などの中国の古典を読んでみると、政治や経済、教育そして個人の修養はどうしたらいいのかというようなことが書かれています。現在の中国のことはよく分かりませんが、あれだけ広い土地に色々の民族が暮らしているわけですから、昔からなかなか治めにくい国だったと思います。だからどうしたらいい政治ができるかということ孔子や孟子が考え、説いて回ったのではないのでしょうか。そうした本を読んでいるうちに、私は会社経営も中国古典に見られる政治の要諦と同じでよいのではないかと考えました。

## 六、イエスと言えぬ勇氣と、ノーと言えぬ勇氣

十年前に松下幸之助さんが七十億円の私財を投じて松下政経塾を創設されたのは、日本は経済はうまくいっているが政治はうまくいかない、立派な政治家を作らなければならぬという目的からでした。ある時、塾生から「政治と経営はどう違うの

ですか」と問われた時に、松下さんは「両方とも同じこと。精神は同じです」と答えられたといひます。会社経営のスケールを大きくしたものが国家の政治といえるでしょう。この松下さんの言葉を聞いて、私は中国の古典でどういう政治をやったらいいかということ、会社の経営に持ち込んでいいんじゃないかとかねがね思っておりましたが経営の神様といわれる松下さんからお墨付きを頂戴したような気がしました。

社長就任時、私は「三者総繁栄」ということを提唱いたしました。一つには、われわれの会社をより良く、より大きくしようじゃないか。つまりわれわれの会社は株式会社でなく相互会社でありますから契約者の会社であります。だから契約者に対して心の籠ったサービスをやらなければならぬ。そのためには保険料を下げるとか、配当金を多くするとかということをやっていくかなければならない。それだけでではなくして従業員は契約者に対して真心をもってサービスをしなければならぬ。それには会社の内容をよくして、会社のスケールを大きくしなければならぬ。しかしそういうことをするためには、全従業員がその気持ちになつて一生懸命に働かなければならぬ。

そのためには全従業員の心を良くしなければならぬ。すなわち、契約者、会社、従業員がともに繁栄するようにしなければならぬという具合に考えたわけでありませぬ。

今一つ、社長としての基礎となる考え方として「忠」と「恕」を掲げました。「論語」の中に、「子曰く、\*参や、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯、子出ず。門人問うて曰く、何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。」(\*参—曾子の名)とあります。すなわち、孔子が、「参よ、わが道は一つのこと貫かれていゝ、さようでございます。」と答えた。孔子が部屋を出て行くと他の門人たちが、「何のことかさっぱり分らない。どういう意味でしょうか。」と曾子に尋ねました。曾子は、「先生の道は、忠恕で一貫しております。誠実な心と相手を赦す愛情の心で貫き通しておられる。」と教えたということ

です。ところが「論語」の他のところで、「子貢問うて曰く、一言にして以て終身これを行ふべき者ありや。子の曰く、其れ恕か。己れの欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」とあります。孔子の弟子の子貢が、「一言で、一生涯しなくてはいいけないことがあるでしょうか。」と孔子に尋ねたところ、孔子は、「それは恕だろうか。」「自分の望まないことは人にもしむけないことだ。」と答えたといひます。私が実際にやってきたことが、それに則しているかどうかは他の人の判断に任せるしかありませんが、私としてはこのようなことを心掛けて経営を行なってきたつもりです。今一つ経営にはどうしても勇氣が要ります。イエスと言えぬ勇氣とノーと言えぬ勇氣を持ち合わせるには大変なことです。チャーチル首相が第二次世界大戦時に「財を失つても僅かな損失だ。名を失うことは大きな損失だ。しかし、勇氣を失うと全てを損失する」と言ったことは有名ですが、ゲートも「財を失つても損失は軽い急いで建て直し新たなものを得ればよい。名誉を失えば損失は大きいが、是非とも声望を得て人々に考えを改めてもらわなくてはいいけない。勇氣を失つたらもはや取り返しがつかない。生まれてこなかったほうがましだろう」と強烈なことを言っています。

## 七、利益の追求は正々堂々としたやり方で

最近様々なことがあります。クウェートにイラクが侵攻しイラク軍と多国籍軍との間で戦争が始まりま

した。そこで、日本がこの危機にどういう協力ができるかということになりましたが、自衛隊派遣は国会で廃案となりました。そういう事態を見ていますと論語の中で「士は危うきを見ては命を致し」というのがあり、君や父あるいは国家が危うきを見ては命をいたし、「得るを見ては義を思い、祭りには敬を思い、喪には哀を思う。其れ可ならんのみ。」と言っています。危うくなったら命を賭して、何か利益になるものであれば、果してそれが正しい道であるかを考えなくてはいけないということです。また昨年は私もグループ内でいくつかの不祥事がありました。論語に「利に放りて行えば怨み多し」という言葉もあります。利益ばかりを追求すると恨みを買うということですね。「君子は義に喩り小人は利に喩る」という言葉があつて、立派な人は何が正しい道であるかということを探ることによって物事を処理するが、小人は何が利益であるかということによって処理します。

このようなことを考えてみますと、「利益だから」というよりも「何が正しい道であるかを考えることが大切です。しかし、人間が利益を追求するということは当然なんです。住友の先輩で伊庭貞剛という人は、「君子は財を愛す。これを取るに道あり」と言つて、利を愛さなければ世の中のためにならないから、やはり会社を大きくして世の中のために多くし従業員の生活を豊かにする。しかし、それは正々堂々たるやり方でなくてはならないと語っていました。この方は五十八歳で住友を引退されたのですが、引退される直前に「少壯と老成」という論文がある経済誌に発表され、その中で「事業の進歩発達に最も害をするものは青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」と言っています。私は別にのさばっているつもりはありません。それでも若い人たちは「もうそろそろ会社へ出てこなくてもいいのでは」と感じているかも知れませんが、跋扈しないようにしようと思つています。

## 事務局近況

● 湾岸戦争はアメリカを中心とする多国籍軍の軍事的圧勝という形でとりあえず終結しましたが、これでアラブ世界の抱える根源的な問題が解決されたわけでは勿論ありませんし、国際社会で日本が果たすべき責任と役割は何かという重い問いかけに対する答えを私達は未だ見出し出せていません。このような悲劇を遥か地の果てで起きた一過性の出来事として眺めることはもう許されません。世界中に様々な紛争が存在し、多くの人々が傷つき亡くなっています。その痛みを知り、解決のために私達日本人がどのように貢献していけばいいのかを探る第一歩として、今回、中東及びイスラム世界に関して学ぶ勉強会を3回シリーズで開催しています。第一回は、去る4月11日に東京国際大学の渥美堅持教授をお招きし、湾岸戦争後の中東情勢についてお話を伺いました。なお、第二回は5月8日に元駐イラク大使島静氏(テーマ「中東の今後」)、第三回は6月8日に神田外語大学教授アブイーン・ベイ氏(テーマ「イスラムの心」)をお招きする予定です。ご意見ご要望を事務局までお寄せ下さい。

● 今号のMRAワールドニュースの中でラジモハン・ガンジー氏のドキュメンタリービデオ「真実との出会い」のロンドンでの試写会の様子をお知らせしましたが、ビデオ(英語版40分)がイギリスより届きました。そのコピーを五千円(VHSのみ・送料込)でお頒けしています。ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

## MRA出版物のご案内

# 日本の進路を決めた

。国境を越えた平和のかけ橋。

# 10年

元・MRA日本駐在代表

バーゼル・エントウイッセル 著  
藤田幸久 訳

ジャパントイムズ刊 定価1800円

本書は、生活に追われ、希望を失っていた日本人の中に、真の民主主義に目覚め、国際社会に復帰しようという意欲をかき立てようとした十年間の著者の体験をつづつたものである。有力な政治家、実業家を回想しながら著者は、当時の日本人の平和に対する真しな努力を伝えている。著者の眼は経済大国として新たな国際的孤立に直面している現在の日本に対する警告の意味を含んでいる。特に韓国やフィリピンへの謝罪を率直に表明した当時のMRAの日本人関係者の態度は、最近の日韓関係の推移の出発点として注目される。(90年6月3日朝日新聞読書欄書評より抜粋)

○全国の書店でお求め下さい。

MRAでもお取り寄せいたします。

JAPAN'S DECISIVE DECADE